

岳央は、調教した鷹を使って野ウサギなどの小動物を捕る「鷹匠」になることを目指している。師匠から弟子入りを許され、一羽の角鷹を訓練することになった。

目と鼻の先、ほとんど触れそうなところに、鋭い嘴と黄金色の瞳があった。ロウソク一本の乏しい明かりの下では、鷹の目には、岳央の顔しか見えていないはずだ。

自分が、夢にまで見た鷹を据えた姿にあることが、信じられなかった。しかしいま、確かに一羽の角鷹が、自分の腕に乗っている。

言葉に表せないさまざまな感情が渦を巻き、歓喜を伴って迫り上がってくる。

しかし、その感情に身を任せることは許されない。あくまでも平静に、そして注意深く、鷹との無言の対話に心を集中しなければならぬ。それが、鷹匠へと至る道の第一歩であった。

明かりを点けたとき、一瞬だけ逆立った角鷹の冠羽は、いまはもう寝かされていた。

かわりに、鷹の首がわずかにかしげられた。

目の前にある人間の顔が、自分にとってはなんなのか。危害を加える相手なのか、そうではないのか。どんな意味を持つ存在なのかを認識しようとしているのかもしれない。

おまえは誰だ。

そう鷹が問いかけているように、岳央には思えた。

——よろしくな。これからずっと、おれとおまえは友達だ。

岳央は声に出さずに呟いた。

むろん、鷹は答えない。

夜目が利かない鷹にしてみれば、暗い明かりのなかでは、岳央が左腕に嵌めている籠手の上から動けずにいるだけなのだろう。岳央がこれからの自分のパートナーになるとはまったく考えていないだろうし、目の前の人間に頼る気など、さらさらないに違いない。

鷹は、自分から人間に歩み寄ってくることはない、と師匠は言う。鷹に身を捧げ、人間の側から歩み寄るしか、この孤高の存在と一体になれる方法はないのだという。そのためには、世俗にまつわる多くのものを捨てることになる。

それでいい、と岳央は思う。

それこそが自分の望んだ世界だった。

三日前、調整と訓練をはじめた際、師匠から問われたことを思い出す。

鷹小屋から調整用の鷹部屋へと移した鷹は、籠手から飛び立ちやすくなるために、爪の先端をヤスリで削っておく。その作業が終わる、鷹を暗箱へ入れる前に、師匠が訊いた。

「この鷹はまだ若い。おまえが上手に扱えるようになれば、少なくともあと二十年以上は生きるだろう。」

「はい」

「言ってる意味がわかるか」

「はい、いや——わかりません」

「馬鹿者」

「すみません」

「この鷹が生き続ける限り、おまえは鷹に縛られて生きていかなければならぬ」

「はい」

「人並みの暮らしや幸福を望んだ瞬間、おまえはこの鷹を殺すことになる」

「はい」

「鷹のためにおまえのすべてを捧げる覚悟はあるか」

「あります」

「ほんとうか」

「はい」

「いいだろう」

それだけの会話だったが、いまこうして拳に鷹を据えていると、どれだけ重い言葉を師匠が口にしたか、実感を伴って迫ってくる。

「神室——」と岳央は、鷹の名前を呟いた。

「おれはおまえを決して不幸にはしない」

たとえれば、愛する者への囁きとまったく同じ言葉であるが、いまの岳央には、きわめて自然なものだ。

角鷹は、相変わらず超然としたまま、そばの人間を半ば無視するよう

に、籠手の上に佇んでいる。岳央には、その姿がむしろ頼もしく見えた。

(熊谷 達也「はぐれ鷹」による)

*をつけた語句の△注▽は下に示してあります。

問一 上の文章中の「と」と同じはたらきをしているものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 仲の良い友達と一緒に遊びに行った。
- イ 誕生日にケーキと贈り物を用意した。
- ウ 開演は午後五時ということであった。
- エ 彼のもとには右腕と頼む部下がいる。

問二 上の文章には「現在の場面」と「回想の場面」とがあります。「回想の場面」はどこからどこまでですか。その場面を抜き出し、はじめと終わりをそれぞれ五字で答えなさい。

問三 上の文章中に「歓喜」とありますが、このときの岳央に、このような感情が起こったのはどうしてですか。二十五字以内で説明しなさい。

問四 上の文章中に「一瞬だけ逆立った角鷹の冠羽は、いまはもう寝かされていた。」とありますが、この角鷹の様子からどのようなことが読み取れますか。最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ろうそくの明かりが暗くなり、一瞬だけ警戒心を起こしたが、暗さに慣れたため安心した。
- イ ろうそくの明かりにとまどい、少しずつ警戒心を起こしたが、いつもの無関心をよそおった。
- ウ ろうそくの明かりで目が覚め、瞬間的に警戒心を起こしたが、ほのかな明るさに安らいだ。
- エ ろうそくの明かりに反応し、とっさに警戒心を起こしたが、危険はないと感じて落ち着いた。

問五 上の文章中に「むろん、鷹は答えない。」とありますが、次の文章は、このことについて説明したものです。AとBにあてはまる言葉を、上の文章からそれぞれ五字でそのまま抜き出して答えなさい。

岳央は鷹匠へと至る道の第一歩として、鷹との A を試みようとしている。しかし、鷹の方はそもそも B つもりがないので、岳央のことを無視しているのである。

問六 上の文章中に「この鷹が生き続ける限り、おまえは鷹に縛られて生きていかなければならぬ」とありますが、この言葉には師匠のどのような考え方が表れていますか。四十字以内で説明しなさい。

問七 上の文章中に「岳央には、その姿がむしろ頼もしく見えた。」とありますが、この表現から岳央のどのような気持ちを読み取れますか。最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 角鷹はそっけない態度であるが、愛情がひそかに伝わっている様子も見え、今後一緒に成長できることを楽しみにしている。
- イ 角鷹の何事にも関心を示さない態度に、強い精神力が感じられ、厳しい訓練を乗り越えて立派な鷹になることを信じている。
- ウ 角鷹の人を相手にせず平然としている態度には、人間を寄せつけない厳しさがああり、何事にも動じない力強さを感じている。
- エ 角鷹が人を無視するような態度を示すのは、人間に不慣れたためであり、そこに野生動物が持つ独立心の強さを感じている。

*をつけた語句の△注▽

- 冠羽 —— 鳥の頭頂部にあって周囲より高くなった羽毛。
- 籠手 —— 鷹を乗せるために腕をおおう用具。
- 孤高 —— ひとりだけで誇り高くしていること。

① 金と木でもものをつくるとき、造形的な効果のうえで一番大きくちがう点は、前者は鋭い刃物で切った硬い線で輪廓が截然と区切られるのに対し、後者は軟かい線で全体がふんわりと囲まれているということである。それはちょうど鳥口^{（*）}で引いた機械製図の線に対する、軟かい鉛筆で書いたフリーハンドの線のちがいといったようなものである。もちろん材質のうえで金属は硬く冷たいが、木材は暖かく軟かいといった物理的な相違はあるにしても、それとは別に、この輪廓線による感じ方の差は大きい。石も材質からいえば硬く冷たいが、輪廓線がぼけているから、金属よりもずっとソフトに感ずるのである。

② 西岡氏は法隆寺の円柱を削るとき、台カンナは硬い線になるのでヤリガンナを使ったという。しかも新しい鋼でなく、飛鳥時代の古釘から鍛え直した刃物を使ったそうである。これはまさにヒノキの木肌に鉛筆の線の軟かさを求めたものである。ヤリガンナでは刃物のあたり具合が、そのまま手に伝わって来るから、木は彫刻のノミを使ったときとおなじように、繊維に沿って削り出して行くことができる。ところが台ガンナでは木と手との間に台が入るから、材質が直接手にひびいて来ない。だから仕上げ面は平滑だが繊維が切られていて木の味は生きて来ない。さらに機械カンナになるともはや抵抗は機械が受けるだけだから、相手は木であっても金であってもいっこうに関係ない。ただ目盛に刻まれたとおり正確に厚さを減らして行くだけになってしまう。つまりヤリガンナを使うということは、木にノミあとを残して大きな彫刻を刻んで行くのとおなじやり方だということになる。

③ 考えてみるとわたしたちは、長い間木のこうした使い方をしている間に、身近かな対象を、硬いタッチよりも軟かいタッチでとらえるという習慣が、身についてしまったようである。その例をわたしは「家庭」と「人間」という言葉で説明したいと思う。ヨーロッパの住まいと日本の住まいを比べたとき、一番大きなちがいを感ずるのは、インテリアとエクステリアの取

り扱い方についてである。ヨーロッパでは内と外との間には重くて厚いどっしりとした壁があって、空気までも遮断している。だからインテリアとエクステリアは画然と区別され、対立しているのである。ところが日本の場合は、内から外へいつとはなしに移って行く。軒先や縁側という大根を干したり、干し柿をぶら下げたりするどっつかずの空間があって、インテリアとエクステリアの区切りがはっきりしない。つまり住空間のまわりの輪廓線がぼけているのである。家庭という言葉はそういうイメージを背景にして生まれて来た言葉のようにわたしは思う。その意味は家庭を直訳して、ハウスとガーデンから生まれたと考えたらナンセンスである。なぜならガーデンとはヨーロッパの宮殿のように、見渡す限りの広大な自分の敷地を指すものであるから、日本の庭とはまったくちがう。この場合の庭とは、家のまわりの軒先や縁側のような薄い空気層の意味であろう。とすれば家庭とは、まことに日本的な住まい方を背景にして生まれた言葉とい

ってよいであろう。
おなじことは人間という言葉にもあてはまるように思う。この言葉は人と人との間の空間までを含んだ概念である。中国には人体という言葉はあるが人間という概念にあてはまる言葉はないそうである。人体はボディそのものだから輪廓が明瞭だが、人間のほうはそのまわりになにほどの空気層がまつわっているから、輪廓が漠然としている。これは明治のはじめにつくられた言葉だというのが、いかにも日本的だと思う。こうした言葉が生まれたということは、日本人は鳥口の線よりも、鉛筆の線のほうが好きらしいということである。それが家庭の庭であり、人間の間である。材料と思考方式、そのどちらが先であるか、わたしは知らない。だがこれは興味あることだと思う。

（西岡 常一・小原 二郎「法隆寺を支えた木」による）

*をつけた語句の△注▽は下に示してあります。

問一 上の文章中に「金と木」とありますが、両者の違いを文章に沿って、次のようにまとめました。AとBにあてはまる言葉を、上の文章からそれぞれそのまま抜き出して答えなさい。

素材	材質	造形的な効果
金	硬く冷たい	硬い線で輪廓が截然と区切られる
木	A	B

問二 上の文章中に「台カンナは硬い線になるのでヤリガンナを使った」とありますが、このことについて、次の(一)、(二)の問いに答えなさい。

- (一) 「ヤリガンナ」を使うことの利点として、最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 台カンナと違って、ヤリガンナは、新しい鋼だけではなく古釘からでも作ることができること。
イ 台カンナと違って、ヤリガンナは、材質がどのようなものであっても全く影響を受けないこと。
ウ 台カンナと違って、ヤリガンナは、彫刻のノミのように削る感覚が直接手にひびいてくること。
エ 台カンナと違って、ヤリガンナは、機械カンナのように正しく滑らかに削ることができること。

- (二) 「ヤリガンナ」を使って仕上げることで、どのような効果が生まれますか。二十五字以内で説明しなさい。

問三 上の文章中に「わたしは『家庭』と『人間』という言葉で説明したいと思う。」とありますが、次の文章は、「家庭」という言葉についてまとめたものです。あとの(一)、(二)の問いに答えなさい。

ヨーロッパでは、家と庭の間が A によって明確に分けられている。一方、日本における庭は、家のまわりの薄い空気層のようなものであり、内と外との境界を B であり、ヨーロッパと違って家と庭がゆるやかにつながっているの

- (一) A にはあてはまる言葉を、上の文章から十五字以内でそのまま抜き出して答えなさい。

- (二) B に入る適切な表現を考えて、五十字で答えなさい。

問四 上の文章中に「材料と思考方式、そのどちらが先であるか、わたしは知らない。だがこれは興味あることだと思う。」とありますが、「興味あること」とはどのようなことですか。「材料」と「思考方式」の内容がわかるように、五十字以内で説明しなさい。

*をつけた語句の△注▽

- 截然 ———— 区別がはっきりしている様子。
鳥口 ———— 製図用具の一種。
台カンナ(台ガンナ) ———— カンナの種類の。
ヤリガンナ ———— 住居の内側。
インテリア ———— 住居の外側。
エクステリア ———— 住居の外側。

第三問 次の問いに答えなさい。

問一 次の文の——線部①～⑧のうち、漢字の部分はその読み方をひらがなで書き、かたかなの部分は漢字に改めなさい。

- ・ 木々の緑が鮮やかだ。
- ・ 科学技術の進歩が著しい。
- ・ 演奏会の余韻を楽しむ。
- ・ 弱点を克服する。
- ・ 弓的的をやる。
- ・ 彼の行動は人々に勇気をアタえた。
- ・ 会のウンエイを任された。
- ・ 一人一人のコセイを大切にする。

問二 次の行書で書かれた漢字を楷書で書いたとき、総画数の最も多いものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア イ ウ エ

編補閣筋

第四問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

二月にいたりても野山一面の雪の中に、清水ながれは水気温かなるゆゑ雪の少し消ゆる処もあり、これ水鳥の下りる処なり。雁これを見ればまづ二、三羽ここにおりて己まづ求食り、さて糞をのこして喰ある処の目とす。俚言にこれを雁の代見立てといふ。雁のかくするは友鳥を集ひきたりて、かれにも求食らせんとてなり。朋友に信ある事人も恥づべき事なり。

(「北越雪譜」による)

△注▽ 俚言——ある地域特有のことば。
かく——このように。

問一 右の文章中の「ゆゑ」を現代かなづかいに改めなさい。

問二 右の文章中に「雁の代見立て」とありますが、これは雁がどのような行動をとることですか。二十字以内で説明しなさい。

問三 右の文章で述べられていることと合っているものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 雁は自分の信念に基づき自信を持って行動するが、人はそのような行動を避けたがる。
- イ 雁は春の到来を告げる水鳥なので、雪深い山里の人々は楽しみにして待ち望んでいる。
- ウ 雁は仲間と支え合って生きていこうとしているが、それは人においてもよくある話だ。
- エ 雁はお互いを思いやって行動しているが、それは人にはなかなかできないことである。

問三 次の(一)～(三)の文の [A] [B] [C] にあてはまる言葉として、最も適切なものを、それぞれア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- (一) このシューズは軽くて、 [A] 丈夫な素材で作られています。
- ア しかし
- イ しかも
- ウ または
- エ なぜなら

(二) その話は [B] うそではあるまい。

- ア まんざら
- イ あたかも
- ウ さぞかし
- エ かならず

(三) お客様、忘れものを [C] ようご注意ください。

- ア ございません
- イ いたしません
- ウ なさいません
- エ いただきません

第五問 (作文)

「つながり」ということについて、あなたが日ごろ感じていることや考えていることを、百六十～二百字で書きなさい。